

# ある迷信現象に対する態度について

—キツネモチ迷信現象に対する態度測定の問題（その一）—

野 村 昭

## § 1 問 題

先にわれわれは青年を用いて、「キツネモチ」といわれる迷信が、現象的に、現在、どのような出現の様態を示しているかを記述し、それは「憑依現象」としてのキツネモチと、「社会現象」としてのそれとの二面性をもつて顕現しており、その中、殊に「憑依現象」は形骸化し、「社会現象」として問題化していることを指摘した(1)。すなわち、「キツネモチ」家筋と称せられる一群の人々は、今や「憑かれた」人々や、「キツネを操る」人々であるよりは、むしろ、弱勢なる集団(underprivileged group)のメンバーになつていたのである。しかも、80%以上の青年にとつてはキツネモチ現象に対して否定的態度をとりながらも、その否定は多く「憑依現象」に向けられ、必ずしも「社会現象」にかかわることの多くないことを見出したのである。記述的段階での先の研究では、そこから幾つかの態度形成・変容に関する仮説を導出したのであるが、本研究では、殊にこれらの態度を明確に定位するために意見尺度を構成し、更に、それらの尺度を用いて、キツネモチ現象の伝播している地域の相違によつて、態度の変化がどのように見られるかを探索的に見出さむとしたものである。

## § 2 態 度 測 定

### 〔用いた対象〕

島根大学学生(♂, ♀)  
 島根農大女短大学生(♀)  
 松江城西学園学生(♀)  
 K村成人\*  
 (9名, 30才以上)

### 〔対象の出身地〕 Tab.2

〔日時〕 1957年7月~10月

〔尺度作成の手續き, 及びその結果〕

a) 先づ予備的操作として

Tab. 1. 調査対象(人数)

地域	学校	島 大 ♂	島 大 ♀	短 大	城 西	計
同 村		7	3	16	13	39
近 村		2	0	3	3	8
他 村		7	6	25	14	52
不 知		1	1	4	0	6
計		17	10	48	30	105

○この他島根県K村 成人9名 平均年令 50.7年 (37~80)

○態度分析では、この中、城(同)2名、短(他)1名を解答不備の為に省く。

○Ssの平均年令 18.5年 (29年~18年)

(註) \* これらの対象は、尺度構成には用いず、年令別比較を試みる際にのみ用いられた。

Tab. 2. 調査対象出身地

(人数, ( )内は%)

	島 根 県										鳥 取 県 伯耆地方 米子	他 県	不 明	総 計				
	出 雲 地 方					石 見 地 方									隠岐地方			
	郡部	松江	出雲	平田	安来	計	郡部	浜田	大田	益田						計		
同 村	13	2	5	1	0	21 (41.2)	4	1	1	0	6 (31.6)	1 (50.0)	5	2	7 (35.0)	1 (10.0)	3	39
近 村	3	1	1	0	1	6 (11.7)	0	1	0	0	1 (5.2)	0	1	0	1 (5.0)	0	0	8
他 村	7	14	2	1	0	24 (47.1)	5	1	5	1	12 (63.2)	1 (50.0)	5	6	11 (55.0)	4 (40.0)	0	52
不 知	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1 (5.0)	5 (50.0)	0	6

Pr  $\{\chi^2=44.88\} < 0.01$  (df=12, たゞし不明を除く)

キツネモチ現象を知悉している島根大学学生、及び同村内にかゝる現象を経験する人々 35 名を用いて、サーストン法の手続きにより、キツネモチ現象についての意見 83 項目を自己の意見にかゝりなく客観的に評価せしめ、その中より、評価の散布度 Q 値の少い 44 項目 ( $Q < 0.65$ ) を選び出した。この場合の客観的意見項目評価には 7 点尺度を用いているから、尺度値は 1.00 ~ 8.00 に分布される。われわれが、この手続きを用いたのは、①項目の語義の多義性の排除、②キツネモチ現象に対する肯定的項目と否定的項目の選定\*のためである。(Tab. 3. B 欄)

b) ついで、これら 44 項目の中よりサーストン尺度値での中間値を示した項目 (この場合は 4.00 ~ 4.99) のスコアを示した項目にあたる)を除いた諸項目 (36 項目) をもつて尺度構成の意見項目の素材たらしめた。(Tab. 3. A 欄)

c) 以上の手続きの後に、こゝに用いた被験者によつて、各項目に対し、それぞれの反応の強さに応じて 5 段階の評定が行われた。そしてこれらの項目に対する「絶対さんせい」を 5, 「まあさんせい」を 4, 「わからない」を 3, 「やゝはんたい」を 2, 「絶対はんたい」を 1 としてウエイティングが行われた。たゞし、否定項目に対するウエイティングは全くこの逆である。だから、キツネモチ現象にさんせいする者ほど、これらの項目に対する反応得点の総和——総得点が高く、反対する者ほど総得点が少いということが仮定される。

d) かくして得られた総得点を基盤として、その順位の上位 25% と下位 25% とを選び出し (総数 102 名中、上位 25 名 (76 点以上), 下位 27 名 (54 点以下)), この上位群の平均得点の差が高い値を示した 20 項目 (1.00 以上) をもつて態度分析の中心項目たらしめた (上下分析; good-poor analysis)。(Tab. 3. C 欄)

e) この 20 項目は、一応、キツネモチ現象に対する態度の弁別力を有するものと考えられるが、

\* こゝで用うる「肯定」、「否定」の語は、以下、キツネモチ現象に対する意見項目の内容に関するものに用い、反応に関する用語は、「さんせい」「はんたい」の語を用うることとする。例えば、「肯定項目」に対する「はんたい」の反応。というように……。そして、その反応群をもつて示される態度を「肯定的」態度、「否定的」態度と呼ぶ。

Tab. 3. 尺度作成

項目	B		C				A		D					E				
	サーストン法	尺度値	上下分析				意見・感じ・考え	附加した得点 (肯定項目)					検討項目	三分法			採用項目	項目の類別
			上位平均値得点	下位平均値得点	上下位の差	上下位差順位		1 絶対さんせい	2 まあさんせい	3 わからない	4 ちよつと反対	5 絶対はんたい		さんせい	わからない	はんたい		
肯定項目	1.58	0.29	3.04	1.40	1.64	3	イ、邪宗・迷信とはもつてのほかだ	4	6	7	6	1		5	7	1		
	1.65	0.33	1.32	1.00	0.32		ロ、ぜひ残しておかねばならぬ											
	1.75	0.44	1.84	1.00	0.84		ハ、立派な信仰である											
	1.88	0.56	3.16	1.41	1.75	1	ニ、本当にあることだ	6	6	5	5	1	○	6	5	2	◎	憑
	2.15	0.58	2.04	1.08	0.96		ホ、話すとあとでたたりがある											
	2.31	0.60	1.68	1.00	0.68		ヘ、名誉ある伝統だ											
	2.33	0.64	3.20	1.78	1.42	8	ト、キツネにとりつかれた人は変なそぶりをする	6	6	5	6	2		6	5	2	◎	憑
	2.42	0.39	1.72	1.03	0.69		チ、村の秩序を保つためには大切だ											
	2.46	0.64	2.24	1.25	0.99		リ、バカげたことだが人がいうから信ずる											
	2.81	0.52	2.88	1.81	1.07	17	ヌ、現実には否定出来ない	5	5	5	3	2	○	5	5	2		
	2.88	0.53	3.40	2.00	1.40	10	ル、うすきみが悪い	6	4	5	4	2		5	5	2		
	3.40	0.54	2.16	1.08	1.08	16	ヲ、残っているのも仕方がない	6	6	6	3	2	○	6	6	1		
	3.46	0.31	2.80	1.23	1.57	5	ワ、無いとは思うが人が言うから信ずる	6	6	6	4	2	○	6	6	2	◎	憑
3.71	0.55	3.40	1.67	1.73	2	カ、ふれないでおいの方がよい	5	5	6	4	2		6	6	2	◎	社	
否定項目	5.00	0.65	2.42	2.72	0.30		ム、キツネモチより大切なことが村にはたくさんある											
	5.37	0.51	1.64	1.00	0.64		ウ、無い方がよい											
	5.72	0.49	2.96	2.00	0.96		キ、老人のくりごとだ											
	5.93	0.61	3.24	2.50	0.74	29	ノ、祈禱師がもうけるだけだ	2	4	6	3	5		2	6	4		
	6.20	0.60	2.64	2.19	0.45		オ、誰でもひなんしていることだ											
	6.35	0.50	2.72	1.30	1.42	8	ク、四等平等の原則に反する	1	5	6	6	6	○	2	6	6	◎	社
	6.54	0.65	2.60	1.58	1.02	19	ヤ、村の人々の教養がないからだ	2	4	6	4	6		2	6	5		
	6.57	0.57	2.40	1.08	1.32	12	マ、科学的な根拠はない	1	6	6	4	6		2	6	6	◎	憑
	6.57	0.57	3.24	2.22	1.02	19	ケ、法律で取りしめるべきだ	2	3	5	5	5	○	2	5	5		
	6.59	0.46	2.28	1.11	1.17	14	フ、バカげたことだ	1	5	7	6	6		1	7	6		
	6.60	0.54	2.64	1.11	1.53	6	コ、無意味なことだ	1	5	7	6	6		1	7	6		
	6.66	0.57	2.52	1.15	1.37	11	エ、抹殺の方向をたどるべきだ	1	5	6	6	6	○	1	6	6		
	6.83	0.61	2.68	1.69	0.99		テ、日本の封建性の遺物である											
6.86	0.55	2.32	1.11	1.21	13	ア、バカげた慣習である	1	5	7	6	6		1	7	6			

7.07	0.64	2.84	1.24	1.60	4	サ、信ずる人間の気持が知れぬ	2	3	7	6	6		1	7	6		
7.12	0.53	1.96	1.12	0.84		キ、差別することは許されない											
7.12	0.59	2.22	1.15	1.07	17	ユ、根強い迷信である	2	6	6	6	6	○	2	6	6	◎	社
7.12	0.59	2.22	1.59	0.63		メ、部落の人々を教育すべきだ											
7.25	0.45	2.22	1.07	1.15	15	ミ、悪質な迷信である	1	2	7	4	4		1	7	4		
7.29	0.42	2.84	1.37	1.47	7	シ、日本社会のガンの一つである	2	4	6	6	6	○	2	6	6	◎	社
7.38	0.32	1.88	1.04	0.84		エ、絶対に打破すべきだ											
7.42	0.29	1.92	1.04	0.88		ヒ、是非抹殺しなければならぬ											

- 〔註〕 A 質問項目（中間項目を除く）  
 B サーストン法による尺度値  
 C 上下分析（good-poor analysis）  
 D 五段階評定のウェイト  
 E 三段階評定のウェイト

1	2	3	4	5
附加した得点 （否定項目）				

\* われわれの結果ではこゝで態度尺度を直ちに構成することは早急の感をまぬがれないと思う。というのは①対象（青年）の全意見に対する総得点の傾向が、キツネモチ現象に対して「否定」する方向にかたよっていること（Tab. 3, C, 殊に上位参照）、②上下分析に用いた平均得点が、果して代表的な得点と見なしてよいかどうかを検討しなければならぬこと（各頻数の拡がりの問題）、③更に上下分析での平均得点の差が、単に「さんせい」における「絶対」と「やゝ」との反応強度の差、及び「はんたい」における「絶対」と「やゝ」との反応強度の差を示しているよりも、むしろ、上位群が「肯定的」態度を示し、下位群が「否定的」態度にかかわっていることの方が項目としてより重要だと思われること、などの理由からである。

f) よつて、選出された21項目\*\*について項目分析を行い、今まで用いて来た5段階のウェイトニングの再検討を行った。この場合に用いたウェイトニングの方法は、ギルフォード（Guilford, J.P.）が示した方法である\*\*\* (2) (4)。その結果、われわれは、Tab 3 .D欄に示されるようなウェイトを得た。こゝに示されたウェイトの数値は、次の二つの意味で考察され得るだろう。すなわち、①それぞれの個々の反応強度における上位群と下位群との差によつて、一つの弁別力を示している。ギルフォードの公式によれば上位と下位との差が大なれば大なるほど、その

\* リツカートは、この上下分析をもつて項目の適合性テスト（test of relevance）と考えている(3)。

\*\* 前段階での選出項目は20項目であつたが、こゝでは殊に反応が「さんせい」と「はんたい」にまたがるとと思われる（ノ）項目を追加した。

\*\*\* ギルフォードの方法  $W = \frac{p_u - p_l}{p_q} + 4$ , W: 反応のウェイト,  $p_u$ : 上位反応比率,  $p_l$ : 下位反応比率,  $p$ : 両グループを合せた比率,  $q: 1-p$

強度のウェイトは4から遠ざかることになる。例えば、(1)項目の「絶対さんせい」のウェイトが4ということは、この強度に関して上位群の人も下位群の人も同じ程度(頻数の比率)に反応しているために、殆んど弁別力を持つていないと思われるし、それに対して全項の「まあさんせい」—6—は、上位群の方が下位群の人々よりも多く反応しており、逆に「絶対はんたい」—1—は、下位群の人が上位群の人々よりも反応が多く、共に弁別力を持つていているということが云える(以下、これらの弁別力を、かりに、絶対的弁別力とよぶ)。②更に、これらのウェイトを各反応強度間のウェイトとして相対的に考察するならば、5:4:3:2:1の得点附加に対応してそれぞれのウェイトが配布せられるべきことが仮定出来る\*。例えば、先述の(1)項においては、「絶対さんせい」を除いて、他の強度はそれぞれに絶対的弁別力を有すると云えようが、この意見項目に対する一連の反応強度の関係から見れば、ウェイトは「わからない」—7—を頂点として、「さんせい」「はんたい」に向うに従つてウェイトが下り、決して弁別力があるとはいえないだろう(以下、これを相対的弁別力とよぶ)。

われわれは、この絶対的弁別力と相対的弁別力の二点から検討し、一応、Tab. 3, D欄の○印を附した9項目を考慮することが出来た。このような項目分析の手続きは、単なる平均得点による上下分析のみの不充分さを明らかにしてくれるものと考えられる。

g) しかし、なお、これでも不十分な点が残つている。というのは、①肯定項目に対する「さんせい」反応、及び否定項目に対する「はんたい」反応での強度(すなわち、キツネモチ現象に対する「肯定」態度の割合)は、殆んど相対的弁別力を持つていないということと、②全般から見ても、「わからない」とする反応強度の絶対弁別力が高いことである\*\*。この事実は、尺度化に用いた被験者の反応傾向が、総体的に、キツネモチ現象に対する「否定」にかたより、そのために、「肯定」態度の強度は殆んど相対的弁別力をもたずに均一化されてしまい、「わからない」とする中間強度にまでもその均一化がもたらされて、「肯定」態度が中間的態度によつて代置されていることを示していると考えられるが、尺度構成の上からは、ウェイトに更に検討を加える必要がある。そこで、これらのキツネモチ現象に対する「肯定的」態度強度の相対的弁別力の欠如を補足する意味において、先の21項目について二分法(dichotomy)を用い、「わからない」を強度のウェイトより除外して、「さんせい」と「はんたい」のみにてウェイトを試みる。(Tab. 3, E欄)たゞし、この場合、「わからない」\*はウエイティン<sup>(次頁)</sup>

\* 必ずしも、この割合でウェイトが与えられる必要はないであろうが、「絶対さんせい」は上位群と下位群の差が最大で、上位群がまさり、漸次その差が縮小して「わからない」では差が0となり、漸次「はんたい」の強度が大になるほど逆に下位群の反応比率が増大するということが仮定される理想的モデルである。(肯定項目に対する場合)。たゞし否定項目に対する場合の変化の関係は、もちろんその逆である。

\*\* これは、仮定の上からするならば、或意見項目について「さんせい」と「はんたい」との中間的強度として考えられているのだから、ウェイトは、4に近いものであることが望まれよう。

グより除外されているのであつて、測定手続きでは存在するから、その限りでは三分法ということが出来る。

かくして得られたウエイトの中で、「肯定態度」6、「否定態度」2のウエイトをもつ諸項目を最後の採用項目として、以下の態度測定に用うることにした(8項目)。この6、2のウエイトが採用せられたのは、絶対的弁別力0の場合が、ウエイト4であるから、二分法での絶対的弁別と相対的弁別とを同時に満しめるウエイトを求めるためである。\*

h) 選出された8項目は、それぞれ意見項目内容の示すところに従つて、「憑依現象」としてのキツネモチに向けられている意見か、「社会現象」としてのそれに向けられている意見かが分類された(Tab. 3, E欄)。

以上の手続きによつて、「キツネモチ現象に対する態度尺度」が構成せられたのである。\*\*\*

#### 〔態度と地域との関係〕

われわれが求めた態度尺度に定位されるキツネモチ現象に対する態度は、反応者の生活する地域が変化するに従つて、如何に変容しているだろうか。こゝではその関係を見ようとするものである。(ただし、以下の分析は尺度構成途上のものであつて、精緻な分析は今後をまたねばならない。)

〔用いた対象〕 尺度化の場合と同じ。

〔地域の区分〕 Tab. 4 に示される質問紙に正直にチェックすることが求められた(無記名、ただし、意見尺度とは符号をもつて連繋する)。これはキツネモチ現象に関して地域と知悉度の関係を知るために(A)「村落内におけるキツネモチ現象の状況」と(B)「その内容を知っている度

Tab. 4. 知悉度と地域とを示す質問

◎ 自分の該当する項に一つだけ○をつけて下さい。

〔A〕 キツネモチは、

1. 自分と同じ村の隣近所にある。
2. 自分の村にはないが、近くの村にあることをきいている。
3. 自分の村にも、近所の村にもないが、そういつたことはきいている。
4. 今までにきいたこともない。

〔B〕 キツネモチということが、どんなことかを

1. よく知っている。
2. まあ知っている。
3. あんまり、よく知らない。
4. 全然知らない。

\* 「わからない」という反応強度は、この場合「さんせい」、「はんたい」と同次元における中位的強度を示す用語と考えられるのだが、多義的で質的に異つた反応が混在するおそれがある。再検討を要すると思う。しかし、こゝで、この強度用語を除いたのは、操作的に、相対的判別力を欠いているためである。(この反応の分析は、次回に取扱う。)

\*\*\* だから、こゝで用いている二分法は、平均得点が4に近くなればなるほど、「さんせい」と「はんたい」との中間強度に近づくことを仮定している。

\*\*\*\* 尺度の信頼性、修正などは、今後に残された課題として小論では言及していない。

合]\*とを主観的に記入させたもので、他に「出身地」が附加せられた。だから、この分析での一つの徴標になっている地域区分は、必ずしも客観的事態そのものを指しているわけではないが、Tab. 2にでも示されるように、出雲・(隠岐\*\*)地方に自村内に存在すると答えたものが最も多く、しかも「知らない」と答えたものの皆無なのは、更に、出雲・(隠岐)地方を中心として他地方に行くに従って、その土地とキツネモチ現象との関係が稀薄になることを示しているのは、この求められた資料が全く妥当性を欠いているといつてしまえないものをもつていることを示しているといえよう。また、地域と知悉度との関係においても、Tab. 5. に示されるような一つの傾向

Tab. 5

知悉度と地域との関係(人数、( )内%)

知悉度 地域	よく知 つてい る	まあ知 つてい る	あんま り知ら ない	全然知 らない
同 村	2 (6.9)	11 (37.9)	16 (55.2)	0 (0.00)
近 村	0 (0.00)	2 (33.3)	4 (66.7)	0 (0.00)
他 村	0 (0.00)	14 (35.9)	24 (61.5)	1 (2.6)
不 知	0 (0.00)	0 (0.00)	2 (50.0)	2 (50.0)

Pr{ $\chi^2=27.30$ }<0.01 C=0.58

をもつている。すなわち、その関係の強さは比較的高く\*\*\*、既にわれわれが考察してきたように(1)、キツネモチ現象が伝播している地域ほど、よく知悉している傾向がうかがえるのである。これらの「地域」、「出身地」及び「知悉度」との関係性の上で理解すれば、同村内にキツネモチ現象を経験するものは出雲・(隠岐)地方に多く、かつ、彼等はよくその事象を知悉していると云えよう。われわれは、先ず、このような資料に示された事実傾向に基き、地域の変化を一つの徴標として、キツネモチ現象に対する態度との関係を見て行きたいと思う。地域区分は、質問表(A)項に従って、①同村、②近村、③他村、④不知の略称で4区分する。\*\*\*\*

Tab. 6 二分法による平均得点(地域別、年齢別、類別比較)

項目 地域 類別	肯定項目				否定項目				全平均 得点		
	ニ	ト	ワ	カ	肯定項目	ク	マ	ユ		シ	否定項目
	憑	憑	憑	社	平均得点	社	憑	社		社	平均得点
同村成人	2.57	4.00	4.50	5.11	4.05	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	3.02
同 村	2.76	3.40	3.06	3.38	3.15	2.00	2.46	2.00	2.38	2.21	2.68
近 村	2.80	2.00	3.00	2.57	2.59	2.00	2.00	2.00	2.80	2.20	2.40
他 村	2.17	2.55	2.43	3.14	2.56	2.34	2.00	2.29	2.30	2.23	2.40
不 知	3.33	2.00	3.00	3.00	2.83	2.00	2.00	3.00	2.00	2.25	2.54
平均	2.77	2.49	2.87	3.02	2.79	2.09	2.12	2.32	2.37	2.22	2.51

\* この[B]項に関する対象は、短大、城西学生計78名のみについて求められた。よつて、Tab. 5の分析は、これらの対象におけるものである。

\*\* 隠岐地方は資料僅少の為、その数値(%)は必ずしも信頼出来ない。(Tab. 2.)

\*\*\* これはC(連合係数)によつて数量的に示される。その値が0.866に近いほど、関係の強さが大なることが云えるのだが、この場合は、0.58で、比較的高い。

\*\*\*\* 各Tableに用いた略称は、すべてこの区分である。

## 〔態度と地域との関係〕 (Tab, 6,)

a) 全体傾向——二分法による態度尺度で得られた平均得点を各地域別に示せば, Tab, 6 のようになる。これを全般的に眺めるならば, 次の様に幾つかの事実を指摘することが出来るであろう。

1) 各地域をとわず, 得点の全体傾向は, キツネモチ現象に対して「否定的」態度を示している(「肯定的」と「否定的」の中間得点:  $4.00 > 2.51$ : 全体平均得点)。

2) このような「否定的」態度の中にも, 地域によつて強度の差異が少し存すると思われる。(  $0.20 > p_r\{F_0 = 2.61\} > 0.05$ , 殊に「同村」と「他村」の比較の場合  $0.25 > t_0 > 0.10$ )。すなわち, 「同村」ほど「否定的」態度が弱い傾向がある。

3) 全般的に肯定項目に「はんたい」するよりも, 否定項目に「さんせい」する度合の方が大きく(得点: 肯定全平均  $2.79 >$  否定全平均  $2.22$ ), その中で肯定項目に「さんせい」は殊に「同村」に高い傾向がある。(他村との比較  $t_0 < 0.10$ ),

4) 「憑依現象」に対する態度と, 「社会現象」に対する態度とでは, 前者においてのみ地域差が認められ, 「同村」の方が「他村」よりも「憑依現象」を否定する態度は弱い。(  $0.10 > t_0 > 0.05$  )

この態度尺度で得られた全平均得点が「同村」ほど高いのは, (3), (4)の理由によるものと考えられるが, 肯定項目に「憑依現象」に関する意見が, 否定項目に「社会現象」に関する意見が多く偏つたために, 何れの要因によるかは早断出来ない。

## b) 各意見項目についての地域別比較

(イ) キツネモチ現象は本当にあることだ(憑依現象)——「同村」「他村」「近村」及び「不知」の各得点間には有意な差が認められない。(  $P_r\{F_0 = 0.44\} > 0.05$  )。しかし, 特に「同村」と「他村」との得点比較を試みるならば\*, 「同村」のものほど, 本当にキツネモチはあることだとする態度が強いことを示している。(  $0.20 > t_0 > 0.10$  )。

(ロ) キツネにとりつかれた人は, へんなそぶりをずる(憑依現象)——全体比較では地域間に差異が見られない。(  $P_r\{F_0 = 1.35\} > 0.05$  ) が, 二地域比較では, 「同村」の方が「否定的」態度が弱い。(  $0.10 > t_0 > 0.05$  )。

(ハ) キツネモチ現象はないと思うが, 人が云うから信ずる(憑依現象)——こゝでも全体比較には差がなく(  $P_r\{F_0 = 1.16\} > 0.05$  ) 二地域比較で「同村」の方が「否定的」態度が弱い。(  $0.20 > t_0 > 0.10$  )。

(ニ) キツネモチ現象にはふれないでおいの方がよい。(社会現象)——こゝでは, 地域の差異にともなつての態度の変化は見られない。(  $P_r\{F_0 = 0.42\} > 0.05$ ;  $0.50 > t_0 > 0.40$  )

(ホ) キツネモチ現象は, 四民平等の原則に反する。(社会現象)——全地域間の差異は認められないが(  $P_r\{F_0 = 1.08\} > 0.05$  ), 二地域比較ではむしろ, 「同村」のものの方が「他村」のものよりも, やゝこの意見に「さんせい」することが強い傾向にある(  $0.20 < t_0 < 0.10$  )。すなわち, キツネモチ現象への「否

\* こゝで特は「同村」「他村」とを取出して比較するのは, 「近村」及び「不知」の反応者が僅少なるためである。以下, 全体比較の場合と, 「同村」と「他村」とを比較する場合(二地域比較と略称する)とを常に検討する。

定的」態度が強いことになる\*。

(マ)キツネモチ現象には、科学的な根拠はない(憑依現象)——全地域間にもやや差異が認められる( $P_r\{F_o=1.92\}<0.20$ )が、殊に二地域比較での差異は明らかである( $0.05<t_o<0.01$ )。これは、「同村」のものが他地域のものに比して、科学的根拠を打消す態度の弱いことを示している。

(ニ)キツネモチ現象は根強い迷信である(社会現象)——全地域比較にも( $P_r\{F_o=2.21\}<0.20$ )、二地域比較にもやや差異が認められる( $0.20<t_o<0.10$ )。すなわち、これは「他村」のものほど迷信の根強さに対する認識の弱いことを示すものだといえよう。

(シ)キツネモチ現象は、日本社会のガンの一つである(社会現象)——全地域間にも( $P_r\{F_o=0.32\}>0.05$ )、二地域比較にも有意な差異は認められない( $t_o>0.50$ )。

以上、各項目への反応を通覧するに、概してキツネモチ現象の中「憑依現象」の否定的態度は「他村」に強く、「社会現象」への否定的態度は「同村」ほど強い傾向の存することが考えられるのである。

#### 〔態度と年齢との関係〕 (Tab. 6)

年齢によつてキツネモチ現象に対する態度がいかに変容するかを見るために、K村の成人を用いて調査した(9名)。方法は面接法を用い、反応は調査者の方で記入したものである。K村はキツネモチ現象が存在することが既によく知られている村であるから、「同村」青年のみと比較した。しかし、K村成人の資料が非常に僅少で、しかも教育程度が多岐にわたるために、この結果は参照資料としてのみ考えられるもので、もつと改めて調査さるべきだと思う。

a) 全体傾向——成人も青年と全様に、キツネモチ現象に対しては「否定的」態度をもつ傾向を示し、その間に有意な差異は認められない( $P_r\{F_o=0.23\}>0.05$ )。「肯定項目」及び「憑依現象」における是認の割合は、成人の方が強いように思えるが有意差は認められない。( $P_r\{F_o=1.27\}>0.05$ ;  $P_r\{F_o=0.45\}>0.05$ )。

b) 各項目比較——成人の方が「肯定的」態度の強度が大きい傾向があると認められる項目は、(カ)項( $P_r\{F_o=3.83\}<0.20$ )、(キ)項( $P_r\{F_o=5.94\}<0.05$ )の2項で、他の項目には差異が認められない。この(カ)項は「憑依現象」、(キ)項は「社会現象」を示す意見項目と考えられるが、共に肯定項目であるから、全体傾向との関連から、成人は、「憑依現象」を是認する傾向が多いというよりも、肯定項目に「はんたい」することがより弱いと解する方がよいように思える。(もちろん、この肯定項目は意見内容として「憑依現象」から成立っていることの方が多いのではあるが…)。

### § 3 考 察

#### 〔尺度作成への反省・批判〕

われわれは、キツネモチ現象という特殊な事象に対する態度定位をはかるために、態度尺度

\*再説するが、(ク)項以下の4つの意見項目は、内容的に、キツネモチ現象に対しての否定項目にあたるから、この意見に「さんせい」するものほど、ウエイトは低いことになる。すなわち、肯定項目の場合とは、ウエイトは逆になつていのである。

を構成してきたが、ここには未だ幾つかの問題を残しているし、示された結果によつても反省を要する点が存している。以下その問題点について考察しよう。

1) この尺度構成法は、主としてリッカート (Likert, R.) の方法によつてなされたものである。しかし、提示される意見項目の選定にあつては、①内容的に肯定的項目か否定的項目かの決定、及び②その項目語義の多義性の排除を単なる実験者の主観によらないで、サーストンの等現間隔法の手順によつて数量的に算定した。この手続きは、サーストン法とリッカート法とを比較するために、リッカートらによつても示されているものであるが(5)より引用)、このような操作に対しては、例えば、「取扱う項目の性質 (item operating characteristics) について、この2つの方法は論理的に相容れない要求」を持つているし、「理論的には、非単調型の項目がリッカート型の尺度に用いられることは出来ないし、リッカート型の項目をサーストン尺度に用いることも出来ない」(5)という批判がある。たしかに反応強度を各意見項目に対して求めるリッカート尺度では、項目の単純性がサーストン法より求められるし、また、この両者の反応形態は異つていゝるのではあるが、リッカート法では多義性を除く手続きは主観的に委ねられているのだから、また、サーストン法での項目の位置づけに用いられるこの手続きは、全時に多義性検定という性質をもつていゝると考えられるからその限りではこうした操作を併用することは一方法として是認されるであろう。われわれがサーストン法の手続きで得た結果の項目は中間項を除いた肯定的及び否定的なるために多く単純な型のものである。

2) しかし、われわれが採用した8項目の語義について一義性が保たれていゝるか否かを検討して見れば、問題は残つていゝる。例えば「キツネモチ現象は本当にあることだ」といゝる項目は、その反応者の「意見」にかかわらず、「存在」に関する項目として受容された場合、その反応は反転しかねないし、その結果は「態度測定」よりも「知悉度測定」となる。全様のことは「キツネモチ現象は根強い迷信である」といゝる項目についてもあてはまらう。だから、項目の多義性の問題は、必ずしも単調な型の項目が採用されるか否かのみにかかわつていゝるのではなく、むしろ、どのような文脈でそれが述べられていゝるかという度合に關係していゝる。だからその点で上述の項目も、例えば「キツネがつくといゝことは本当にあることだ」として提示することの方が語義が明確であつたと思える。しかし、また、常に「意見」といゝる型でなされる陳述にはこの種の危険性を蔵していゝるとも考えられるし、その陳述の際の情緒的過程が捨象されていゝるのだから、提示される項目は、「意見」よりも「質問」として示された方がよいのではないかと考えられる。

3) この尺度作成に用いられた反応者は大学生である。リッカート尺度のねらいから云うならば、その構成は比較的母集団を限定していゝること(従つて適用範囲が限定されること)になるから、厳密に云うならばこのわれわれの尺度は、キツネモチ現象の波及していゝる全地域に及ぼすことは出来ないことになる。その意味では成人への適用には、項目の選定、及びそのウェイトイングが問題になるといゝる。そして青年と成人とを比較するためには、むしろ成人を母集団として構成せられた尺度と、青年を母集団とした尺度とを尺度それ自体において比較する方

が望ましいだろう。しかし、ここで大学生を使用したのには幾つかの理由がある。①資料が容易に回収し得ること、②キツネモチ現象のように、出雲地方で社会的緊張関係を現出している事象については、意見を表明したことがないことが多いが、比較的學生は報告してくれること\*  
③たとえ意見表明がなされたとしても、學生以外の人々はこのような印刷物への記入に習熟していないこと、などのためである。

4) 尺度の反応強度は、5段階評定では相対的弁別力を持たぬために二分法が採用された。このような事態が生じたのは全般的に、キツネモチ現象に対して「否定的」態度をもつことが多いからであるが、その理由として次のようなことが考えられる。①大学生を反応者として用いたこと。②意見蒐集の際に、肯定意見項目が少なかつたこと、③肯定項目に対する反応と否定項目に対する反応とが相違をもっているように思われること、などである。この二分法では、一応のウェイトがなされたのだが、反応値の総和によつて反応強度を見ようとするのは、反応強度の連続性という視点から云えば粗雑の感をまぬがれないし、示された数値は、むしろ、「肯定的」か「否定的」かの態度方向を示唆するものと考えの方が妥当であろう。しかし、ひるがえつて考えて見るならば、キツネモチ現象という多様な現象に対する態度を見ようとする場合、意見尺度という単純な測定手段を用いる時には、綿密な態度強度の定位を求めること自体が難しい問題であり、意味が少く、態度測定は主としてその方向を測定するに止まるものではなからうか。すなわち比較的、態度方向は安定性を伴っているにしても、その強度は恣意的に止まつていること\*\*を示しているように思える。

なお、二分法では「わからない」を除くことによつて中立的態度を何れかに押込める危険が存するが、この場合は「わからない」を「さんせい」「はんたい」と同次元にあつかわないで、別に検討するのであつて手続き上は除去されているわけではない。だからその意味で、この態度尺度は測定結果の処理の仕方において二分法であつて、手続き上では三分法といふことができる。

5)「わからない」とする態度強度を示す語は既に述べたように多義的である。その限りではまだしも「どちらとも云えぬ」の方がより一義的で強度連続の用語として用いられるであろう。しかし、何れにしてもそこに含まれる反応には、例えば「意見は持つているが、答えたくない」、「考えて見たこともない」、「知らない」、「答えるのが面倒くさい」などの種々の質的に異つた反応が混在していることが予想されるので、どのような場合にも再検討さるべきだろう。殊にわれわれの尺度では「わからない」が、反応強度として中立的強度よりも「肯定的」強度に傾い

\* アメリカの少数集団に対する態度研究でも、多く大学生が用いられているのもこうした理由によるものではなからうか。それだけに資料の偏りが指摘されることにもなる。

\*\* もちろん、これを検証するためには、①再テスト法による信頼性の検討②意見項目の数(多い程、恣意的反応が多くなろう)③反応者の訓練④成人による尺度の構成等、なされねばならない点が残されている。

ているのは、全体傾向が「否定」に傾いていることの他に、「肯定的」態度保持者が、キツネモチ現象への「肯定的」態度をそのまま、表明することをはばかつて、「わからない」に逃避したものが含まれているためであるとも考えられるのである。

#### 〔態度と地域・年齢との関係〕

(結果の要約)

1) 地域の如何を問わず、全体的傾向としては青年は、キツネモチ現象に対して「否定的」態度をとっている。

2) 地域別に見れば、同村内にキツネモチ現象を経験するものほど、やゝキツネモチを否認するのが弱い傾向が見られる。そしてそれは「憑依現象」としてのキツネモチに向けられた態度の差異に基いていると考えられ、「社会現象」としてのキツネモチに向けられる態度では、むしろ、「同村」のものほど、「否定的」態度の強いことを表明しているように思われるが、これは肯定項目としてか、肯定項目としてかの意見項目の提示の仕方にも大いに関係があるように思える(年齢比較の場合も全様)から、項目の検討を俟たねばならない\*。

3) 年齢間の比較では、全体傾向としては青年も成人もキツネモチ現象に「否定的」態度をとっており、有意義な差異は見られないが、前述の地域比較の場合と全様に肯定、否定項目提示方法の検討が望まれよう。

#### 〔キツネモチ現象への態度測定〕

われわれは態度測定の用具として意見尺度を構成した。これは、意見は態度の言語的表明であり、態度を反映している、という仮定に基いている。そして一般には態度測定といえ、意見尺度を思い浮べるほどにこの方法は代表的方法である。たしかに意見は態度の一つの側面的過程といえるし、態度構造を見て行くには比較的明晰な方法といえよう。更に、態度を正しく(そのまま)反映されるために、無記名、秘密保持の確約等の種々の技術が考案せられている。けれどもこのような操作のみでは態度考究にとつて一面的であろうと思われる。殊に、キツネモチ現象に対する態度のように容易には表明されない態度強度については、妥当ではあつてもその有効性は稀薄の感をまぬがれない。われわれの尺度が二分法を余儀なくされるについては、このような観点から分析する必要がある。だから同時に他の方法(例えばプロジェクトクニク;生態学的研究法等)において態度把握の試みがなされることが必要であろう。もちろん、これらの課題は「態度」をどのように考えるか(定義の問題)に関係している。「意見」報告という方法と結びついた仕方では、態度を操作的に規定して行く限りでは、これらの問題が論ぜられることは少い。測定することは、定義することだといえるのだから。しかし、態度をクレッチとクラッチフィールド(Krech, D. & Crutchfield, R. S.)のように「より特殊的に、個体の

\* 同一意見にしても、否定項目として提示された場合に、それに「はんたい」するよりも、肯定項目に「さんせい」し易いことが研究されている(7)。

世界の或側面に関しての、動機的 (motivational)、情緒的、知覚的、認知的 (cognitive) 諸過程の持続的な体制 (organization) (6) と考えるならば、「意見」尺度は知覚的・認知的過程にはかかわつていても、情緒的過程を捨象していることが多いのではないだろうか。リツカート方式における反応の上での態度強度の配慮も、われわれの場合には主として態度方向を示すに止まった。これは一次元性の制約からくる意見尺度の限界ともいえる。(すなわち、反応者は提示された意見に反応するのであつて必ずしも自分の意見ではないので「さんせい」「はんたい」の反応強度も無記的 (neutral) になされる可能性があるといえる。)

同じ意見であつても「はげしい」口調で表明される場合と、「おだやかな」口調で表明される場合とでは、態度強度は異つているといえるし、この観点から云うならば、例えばチェック記入の仕方が乱雑であるとか、中々記入しないとか (中々客観化は困難であるが) の反応の仕方に態度強度が間接的に把握されるように思えるし、キツネモチ現象に対する態度考究では、殊に考慮しなければならぬ側面であると考えられるのである。

#### △文 献

1. 野村 昭：ある少数集団についての一考察。島根大学論集 No.7. 昭32.P43~58
2. 岩原信九郎：教育と心理のための推計学。昭27 Pp. 414 世界社
3. 林 知己夫・池内 一：態度測定法の概観。高木貞二編「心理学における数学化の問題」P187~225, 1955. 東京大学出版会
4. Guilford, J. P. : Fundamental Statistics in Psychology and Education. 2nd. ed. 1950. Pp.633. NewYork : McGraw Hill Co.
5. Green, B. F. : Attitude Measurement. in Lindzey, G. (ed) "Handbook of Social Psychology." vol.1. chap.9. P.335~69, 1954. Addison-Wesley. Publ. Co. (城戸浩太郎・富永健一訳「態度測定」)
6. Krech, D. & Crutchfield R.S. : Theory and Problems of Social Psychology. 1948 New York: McGrawHill.
7. Rundguist, E. A. & Sletto, R.F. : Personality in the Depression : A Study in the Measurement of Attitudes. 1936.  
(from Goodenough, F. L. : "Developmental Psychology". 1945.)